

# 大学生の職業未決定に関わる要因の検討

— 未決定型による比較 —

鹿内 啓子

## 目次

- I. 問題・目的
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察

## I. 問題・目的

青年が大人としてどのように社会的役割を果たしていくのかという重要な課題に大きく関わってくるのは、職業選択と配偶者の選択である。とくに職業決定は青年がアイデンティティを確立していく上で重要な契機となることは、皆の認めるところである。そのため青年(高校生, 専門学校生, および大学生)の職業意識の発達や職業決定のプロセスに関してさまざまな角度から数多くの研究がなされてきた。自己効力感(浦上, 1995; 安達, 2001; 小久保, 1998), 職業レディネス(小久保, 1998)など, パーソナリティ要因を中心として多くの要因と職業発達との関連性が検討されてきた。

鹿内(2004, 2005)は, 青年の職業意識の発達に重要な影響を及ぼす環境要因として子どもが親をどのように認知しているのかを取り上げた。鹿内(2004)では女子高校生で検討したが, あまり明瞭な結果は得られなかった。しかし鹿内(2005)では男女大学生を対象に検討した結果, いくつかの重要な結果が

得られた。その1つは, 同性の親を望ましいモデルとして認知している場合には大学生の職業未決定状態の「未決定」, 「意欲の低さ」, および「決定回避」が低くなる, つまり職業意識がより発達しているという結果が得られた。また女子学生においては, 異性の親である父親をモデルとすることは職業未決定状態のどの因子とも関連していないのに対し, 男子学生が異性の親である母親をモデルとして認知する傾向が強い場合には, 男子学生の決定回避傾向が強くなるという結果がみられた。この点については次のような解釈がなされた。男子学生にとって父親は職業人としてのモデルとなりやすいので, 父親を望ましいモデルとして認知している場合には, 男子の職業意識は発達するだろう。しかし母親はフルタイムで働いていることが多くないので, 職業人としてではなく家庭人としてみられている。そのため母親をモデルとして認知するということは, 母親への依存とみなすことができる。決定回避はアイデンティティ確立に必要な重要な決定の先延ばしであることから, 母親への依存, 言い換えれば母親と息子との心理的な密着が息子の大人としての自立への不安をもたらし, その結果, 自立の遅れが生じているのであろう。

本研究の目的の1つは, 鹿内(2005)で得られた母親をモデルと認知する傾向と男子学生の職業意識との関連性をもう一度確かめることである。先の結果は母子密着が子どもの

自立を妨げるという現代の母子関係の課題と  
 斉合するものであったが、このような結果が  
 一般的に得られるのかどうかを、新たなデー  
 タを加えることによって検討する。

鹿内(2005)では、未決定因子の得点と親  
 の態度認知との関連性が検討されたので、  
 個々人を未決定タイプに分類して各タイプ  
 の特徴を検討するものではなかった。若松  
 (2001)は、大学生の進路未決定者を、気質  
 的に高い不安傾向をもつために未決定状態が慢  
 性的になる「indecisive型」と、進路を決める  
 ための情報が十分でないための未決定である  
 「undecided型」の進路未決定のメカニズムを  
 検討している。そのため進路を決めたこと、  
 あるいは未決定であることに對して納得でき  
 ているかどうか(快適さ)を取り上げている。  
 すなわち決定あるいは未決定であることに對  
 して不安をもっているのか、あるいは決定し  
 たことに納得している、未決定でもそれをあ  
 まり気にしていないかによって、同じ決定状  
 態や未決定状態でも心理的な健康には大きな  
 違いがあると思われる。本研究のもう1つの  
 目的は、決定・未決定状態のどのような側面  
 が強いのかによって大学生をタイプに分類し  
 て、各タイプの特徴や差異を検討すること  
 である。本研究では、下山(1986)の職業未  
 決定尺度を構成する因子の得点の個人内パ  
 ターンによってタイプに分類し、未決定の  
 タイプ間の質的な差異、また決定タイプと  
 の比較を行う。

また本研究では、鹿内(2005)では扱わ  
 れなかった職業志向性を取り上げる。若林・  
 後藤・鹿内(1986)は、仕事や職場に何を  
 求めるかという仕事の条件やその結果に對  
 する期待や好みを職業志向性と呼び、それ  
 を測定するための尺度を作成した。これを用  
 いて、保育系、看護系、人文系的女子短大  
 生の職業意識を検討した結果、職業志向性  
 は職業レディネスや仕事継続意思などと  
 強い関連性を持ち、職業意識の重要な要  
 素であることが明らかとなった。

かとなった。本研究で各タイプの職業志向  
 性の様相を検討することによって、各タイ  
 プの特徴がより明らかになることが期待さ  
 れる。

## II. 方 法

### 1. 調査対象者

私立大学の2年生、3年生、および4年生、  
 女子162名、男子84名、計237名から回  
 答が得られたが、社会人の経歴をもつ者、  
 回答していない箇所が多い者、また父  
 親または母親がいない者などは分析から  
 除いた。その結果、分析に用いたサンプ  
 ル数は、女子125名、男子61名、計186  
 名であった。

### 2. 調査時期および調査手続き

2005年4月上旬の「教育心理学」(筆者  
 担当)の授業時に質問紙を配布し、その場  
 で回答を求め、回収した。所要時間は約  
 15分であった。

### 3. 質問紙の構成

#### (1) 職業未決定尺度

下山(1986)の「職業未決定尺度」鹿内  
 (2005)が選択した23項目を用いた。各  
 項目について自分に当てはまる程度を5  
 段階で評定させた。

#### (2) 「職業人としての自己」のイメージ尺度

鹿内(2005)で用いた「職業人イメージ」  
 尺度18項目から、因子分析の結果因子負  
 荷量の低かった項目、人物の評定には不  
 適当と考えられる項目を除き、11項目  
 を用いた。反対語を両極とした5段階評  
 定を求めた。また鹿内(2005)では職業  
 人一般のイメージを評定させたが、本研  
 究では将来職業に就いて仕事をしている  
 自分を思い浮かべさせて、「職業人とし  
 ての自己」のイメージを回答させた。し  
 たがって自己評価の側面が強くなってい  
 る。

### (3) 職業志向性尺度

将来の仕事や職場に何を求めているのかを知るために、職業志向性尺度を用いた。若林・後藤・鹿内（1986）の「職業志向性」尺度の「挑戦志向」、「人間関係志向」、「労働条件志向」の各因子に対する因子負荷量が高い項目を選び、それに「勤務先が札幌圏にあること」を加え、19項目を用いた。各項目についてそれぞれが仕事や職場に備わっていてほしい程度を、「そう思わない」から「ひじょうにそう思う」までの5段階で評定を求めた。

### (4) 両親の就業状況

父親および母親のそれぞれの就業状況を、「フルタイムで仕事をしている」、「パートタイムやアルバイトをしている」、「仕事をしていない」の3つから選択させた。

### (5) 親の態度認知尺度

仕事を中心に、親の姿勢や生き方また自分の進路に対する態度に関する調査対象者の認知について、鹿内（2005）と同じ尺度（14項目）を用いて、5段階で評定させた。

### (6) 卒業後の希望進路

大学卒業後の進路について、一般企業、公務員、公務員志望だが状況によっては一般企業でもかまわない、教員、教員志望だが状況によっては一般企業でもかまわない、大学院進学、福祉施設・病院、外国留学、専門学校進学、家業を継ぐ、その他、未定の12個の選択肢の中から、1個だけを選ばせた。

### (7) 職業決定の影響因

鹿内（2005）で用いられた、卒業後の方向を決める際に影響すると思われる自分の要因と外的要因からなる16項目のうち、因子分析によりどの因子にも属さなかった2項目を除く14項目について、方向の決定に影響する程度を5段階で評定させた。

## III. 結 果

### 1. 各尺度の因子構造の検討

職業未決定尺度、親との関係認知尺度、進路決定因については鹿内（2005）と共通の項目を用いているので、本調査の対象者と合わせたサンプルで因子分析を行った。

#### (1) 職業未決定尺度

「まったくあてはまらない」を1、「よくあてはまる」を5として1～5点を与え、23項目について主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行ったところ、6因子が抽出された。結果は表1の通りである。

第I因子については、職業を決めてそれを実現する道を進んでいる状態を表す項目においては負の、まだやりたいことのイメージがつかめていない・決まっていない状態の項目においては正の高い因子負荷量が見られることから、「未決定」因子と名付けられた。第II因子については、今は見つかっていないが積極的に見つけようとする姿勢やみつかるだろうという高い期待を表す項目に高い正の因子負荷量がみられることから、「模索」因子といえよう。第III因子は、職業決定や仕事に就くことに対する不安や自信のなさを示しており、「不安」因子と考えられる。第IV因子は、職業の軽視、回避、意欲の低さを表わしており、「職業回避」因子と名付けられる。第V因子は、採用されれば、あるいは生活が安定するならどんな職業でもいいという項目で因子負荷量が高いことから、「安直」因子と解釈されよう。最後の第VI因子は、職業に対する気持ちの揺れ動きを示しており、したがって「不安定」因子と名付けた。

#### (2) 「職業人としての自己イメージ」尺度

5段階尺度の左から順に1～5点を与えて主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行ったところ、「重厚さ」、「軽快さ」、「落

表1 職業未決定尺度の因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

因 子	I 未決 定	II 模 索	III 不 安	IV 決 定 回 避	V 安 直	VI 不 安 定	共 通 性
5 自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく途中である	-0.86	-0.18	-0.07	-0.11	-0.16	0.01	0.81
14 私は今、自分が目指す職業につくために努力している	-0.73	-0.01	-0.23	-0.11	-0.09	0.09	0.61
1 自分の職業についての計画は着実に進んでいると思う	-0.72	-0.03	-0.13	-0.19	-0.05	0.05	0.58
12 将来自分が打ち込める仕事が見つかっていない	0.70	0.18	0.27	0.14	0.15	0.08	0.64
10 自分なりに考えた結果、1つの職業を選んだ	-0.70	-0.36	-0.04	-0.03	-0.15	-0.09	0.65
23 私は「こんな仕事をしたい」という確かなイメージをもっていない	0.60	0.08	0.18	0.22	0.26	-0.05	0.52
17 職業はまだ決めていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う	0.02	0.63	-0.06	-0.01	-0.06	0.12	0.42
15 これだと思う職業が見つかるまで、じっくり探していくつもりだ	0.27	0.56	0.12	-0.02	-0.05	0.11	0.42
19 職業を決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う	0.19	0.53	0.10	0.25	0.19	-0.08	0.43
8 将来自分が働いている姿が思い浮かばない	0.24	0.01	0.67	0.26	0.07	0.00	0.58
9 職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない	0.12	0.05	0.58	0.23	0.11	0.10	0.43
6 将来、誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安がある	0.35	0.08	0.50	0.05	0.01	0.25	0.44
16 自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない	0.04	0.04	0.05	0.55	0.04	-0.01	0.31
20 できることなら職業などもたず、いつまでも好きなことをしたい	0.10	-0.02	0.22	0.48	0.12	0.08	0.30
21 いつも実現できないような職業ばかり考えている	0.14	0.03	0.15	0.46	0.03	0.38	0.40
13 将来の職業については、考える意欲がわかない	0.36	0.05	0.35	0.46	0.17	-0.19	0.54
18 自分の将来の職業について、真剣に考えたことがない	0.30	0.06	0.19	0.41	0.25	-0.30	0.45
3 生活が安定するなら、どのような職業でもよいと思う	0.15	0.01	0.09	0.08	0.77	0.05	0.63
11 自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている	0.22	-0.03	0.05	0.17	0.66	-0.11	0.52
22 将来やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている	-0.16	0.39	-0.15	0.01	-0.19	0.43	0.42
2 あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある	0.02	0.10	0.23	0.03	0.01	0.42	0.24
7 職業についての情報がまだ十分ないので、情報を集めてから決定するつもりである	0.45	0.47	0.19	-0.09	0.13	0.02	0.48
4 職業と言われても、まだ先の事のようにピンとこない	0.28	0.32	0.28	0.28	0.32	-0.23	0.49
固 有 値	4.06	1.70	1.68	1.56	1.50	0.84	11.32
説 明 率 (%)	17.66	7.38	7.29	6.77	6.51	3.64	49.24
$\alpha$ 係 数	0.90	0.61	0.70	0.65	0.72	0.38	

着き」と解釈される3因子が得られた。この結果は、鹿内（2005）では残余項目となった「平凡な一個人的な」が第Ⅰ因子を構成していること以外は同一のものである。鹿内（2005）では一般的な職業人のイメージを評定させ、本研究では「職業人としての自己イメージ」を評定させたという違いがあったが、イメージの因子構造は共通であった。

各因子を構成する項目は以下の通りである。なお、※は逆転項目を表わす。

第Ⅰ因子「重厚さ」：無気力な一意欲的な、※9深い一浅い、※7力強い一弱々しい、3むなししい一充実した、5平凡な一個人的な、

※11豊かな一貧弱な

第Ⅱ因子「軽快さ」：4かたい一やわらかい、※6明るい一暗い、8緊張した一リラックスした

第Ⅲ因子「落着き」：1不安定な一安定した、※2理性的な一感情的な

### (3) 職業志向性尺度

19項目について、主因子法（バリマックス回転）による因子分析をおこなったところ、表2のような結果が得られた。なお第Ⅴ因子は固有値が1に満たないが、これに高く負荷している2項目は他の因子における負荷量が

表2 職業志向性尺度の因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

因子	I 能力 志向	II 人間関 係志向	III 挑戦 志向	IV 安楽 志向	V 地元 志向	共通性
16 専門家として信頼されること	0.70	-0.01	0.15	-0.13	0.16	0.56
14 自分の力で何かを成し遂げられる機会があること	0.62	0.26	0.27	0.12	-0.28	0.61
18 仕事を通して勉強し成長する機会があること	0.60	0.22	0.23	-0.21	0.06	0.50
15 創造性・独創性が求められること	0.57	-0.03	0.32	0.07	0.05	0.43
4 自分の能力が試される機会があること	0.53	0.08	0.47	0.09	-0.15	0.54
5 自分の自由な判断で仕事を進められること	0.45	-0.04	0.33	0.41	-0.03	0.48
9 上司との人間関係がよいこと	0.08	0.85	0.13	0.11	0.06	0.76
1 同僚との人間関係がよいこと	0.07	0.82	0.09	0.03	0.07	0.68
13 職場の雰囲気が家庭的で暖かいこと	0.16	0.55	-0.14	0.27	0.11	0.43
3 安定した勤め先であること	-0.06	0.44	-0.02	0.26	0.08	0.28
7 責任の重い仕事であること	0.17	0.12	0.81	-0.13	0.08	0.73
10 困難な仕事に挑戦する機会があること	0.41	-0.02	0.63	0.03	0.00	0.57
2 仕事内容が複雑で変化に富んでいること	0.23	0.04	0.52	0.00	-0.07	0.33
8 実力本位・業績本位で昇進や報酬が決められること	0.22	-0.09	0.37	0.25	0.03	0.26
12 気楽にできる仕事であること	-0.10	0.17	-0.05	0.67	0.18	0.51
6 休日が多く残業が少ないこと	-0.08	0.19	-0.01	0.60	0.22	0.45
11 給料やボーナスが高いこと	0.12	0.35	0.11	0.56	0.09	0.47
17 自宅から通勤できること	0.12	0.11	0.12	0.24	0.64	0.51
19 勤務先が札幌圏にあること	-0.06	0.17	-0.14	0.23	0.42	0.28
固有値	2.43	2.26	2.14	1.71	0.84	9.38
説明率 (%)	12.77	11.90	11.25	9.01	4.42	49.35
α係数	0.81	0.77	0.70	0.70	0.48	

低く、また他の項目はこの因子に対して低い負荷量しか示していない。このことから他の因子とは独立した明確な内容をもつものであると判断して採用した。

第Ⅰ因子は、自分の能力を発揮したり高めたりすることに関わる項目で高い因子負荷量が得られているので、「能力志向」と名づけた。第Ⅱ因子は、職場のよい人間関係を求める項目で構成されているので、「人間関係志向」と名づけた。第Ⅲ因子は、やりがいや挑戦に関する項目で因子負荷量が高いことから、「挑戦志向」と名づけた。第Ⅳ因子は、心身に楽であることと給料の高さを表わす項目で構成されているので、「安楽志向」と名づけた。第Ⅴ因子は項目内容から「地元志向」と名づけた。

#### (4) 親の態度認知尺度

態度認知尺度の因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果、父親についても母親についても、鹿内（2005）とほぼ同じ3因子が得られた。それぞれ「モデル」、「仕事の話題」、「指示」と名づけられた。各因子を構成する項目は以下の通りである。なお、数字は項目番号を、※は逆転項目を表わす。

父親第Ⅰ因子「モデル」：8 仕事をしている父親を尊敬できる、11 父親は生き方を考える時の1つのモデルになっている、13 父親は将来の仕事や人生についてアドバイスをくれる、12 父親は自分の仕事にやりがいを感じていると思う、1 私の将来のことについて父親とよく話し合う、6 父親がどのような仕事をしているのかを知っている。

父親第Ⅱ因子「指示」：3 父親は私の生き方についていろいろ指図する、※10 父親は私の将来のことを私に任せてくれている、7 将来の職業や生き方について父親の期待を強く感じる、5 父親は私の今の状態について不満をもっている。

父親第Ⅲ因子「仕事の話題」：4 父親は自分の仕事の様子やできごとを家で話題にす

る、9 父親は仕事での不満を家で言う、14 父親は仕事上のことであなたの意見を求める。

母親についてもほぼ同様の3因子が得られたが、第Ⅱ因子が「仕事の話題」、第Ⅲ因子が「指示」であった。項目は省略する。

#### (5) 職業決定因尺度

主因子法による因子分析（バリマックス回転）を行ったところ、鹿内（2005）と同様の、「情報」、「個性」、「親」、「身近モデル」と名づけられた4因子が得られた。各因子の項目は下の通りである。

第Ⅰ因子「情報」：12 大学での授業や講演会など、8 大学での教員のアドバイス、10 先輩からの情報、6 友だちの意見やアドバイス、5 本、大学や専門学校のパンフレット、インターネットなどから得た情報

第Ⅱ因子「親」：11 親のアドバイス、3 親の期待や希望、13 親の仕事

第Ⅲ因子「個性」：4 自分の能力や性格をいかせること、1 自分の興味に合うこと、9 自分の将来の生き方やライフスタイルに合うこと

## 2. 職業未決定状態と親の態度認知との関連性の検討

職業未決定状態の6様態（因子）がそれぞれ、調査対象者の認知した親の仕事や自分に対する態度とどのように関わるのか、またその関連性は性別によって異なるのかを検討する。ここでは親の態度認知の3因子のうち、鹿内（2005）において職業未決定状態と関連の深かった「モデル」因子について、鹿内（2005）のサンプルと本調査のサンプルを合わせて検討する。父親または母親がいない者、また親の就業状態について無回答の者を除き、男子95名、女子252名を分析の対象とした。ここでは、父親および母親それぞれの「モデル」因子得点によって男女それぞれほぼ半数ずつになるように高群と低群に分け、この

要因と性別要因を独立変数とし、職業未決定の6因子の各得点を従属変数とする2×2の分散分析を行った。なおここでの因子得点は、当該因子を構成する項目の評定値の合計点を項目数で除したものをを用いた。また得点が高いほどそれぞれの因子名で表わされる傾向が強くなるように、必要な項目では得点化の方向を逆転した。

(1) 父親の態度認知について

表3は、父親の「モデル」高低×性別の2要因の分散分析の結果である。

「未決定」ではモデル高低の主効果が有意であり、高群よりも低群で未決定傾向が強くなっている。交互作用は有意にはならなかつ

たが、女子よりも男子において父親モデルの効果が大きく、男子のモデル高群では未決定傾向が弱くなっている。「模索」ではどの効果も有意とはならなかった。次に「不安」ではモデル高低の主効果が有意であり、モデル低群で不安が高くなっている。また交互作用も有意な傾向にあり、男子で父親のモデルの効果が強くみられ、とくに男子のモデル高群で不安が低くなっている。「決定回避」についても同様にモデルの主効果が強く、モデル低群で決定回避傾向が強い。また有意にはならなかったが、男子において父親モデルの効果が大きく、男子のモデル低群では回避傾向がもっとも高くなっている。「安直」では、父親モデルの主効果が有意であるが、これと同程

表3 職業未決定についての性別×親のモデル因子の分散分析結果

			職業未決定因子											
			未決定		模索		不安		決定回避		安直		不安定	
			女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
親 の モ デル の モ デル の 母 子 の 因 子	父 モ デル	高群	3.14	2.77	2.94	2.89	2.77	2.40	1.80	1.80	1.97	1.84	3.10	3.27
		SD	0.89	0.90	0.82	0.99	0.91	0.89	0.60	0.55	0.78	0.81	0.91	0.73
		n	133	43	133	43	133	43	133	43	133	43	133	43
	モ デル	低群	3.30	3.29	2.95	2.98	2.85	2.83	1.93	2.17	1.97	2.29	3.07	2.87
		SD	0.91	0.87	0.76	0.76	0.84	0.87	0.61	0.77	0.78	0.97	0.82	0.97
		n	119	52	119	52	119	52	119	52	119	52	119	52
	モ デル	性別主効果(F)	3.11 <sup>+</sup>		0.02		3.50 <sup>+</sup>		2.38		0.89		0.02	
		モデル主効果(F)	9.70 <sup>**</sup>		0.24		5.59 <sup>*</sup>		10.68 <sup>**</sup>		5.29 <sup>*</sup>		4.25 <sup>*</sup>	
		交互作用(F)	2.67		0.17		2.86 <sup>+</sup>		2.63		5.26 <sup>*</sup>		3.14 <sup>+</sup>	
	母 子 の 因 子	高群	2.99	2.86	2.95	3.01	2.65	2.57	1.70	1.95	1.92	1.78	3.20	3.23
		SD	0.86	0.93	0.93	1.00	0.88	0.90	0.55	0.75	0.78	0.70	0.94	0.88
		n	117	48	117	48	117	48	117	48	117	48	117	48
モ デル	低群	3.41	3.25	2.94	2.87	2.95	2.70	2.00	2.04	2.01	2.39	2.98	2.86	
	SD	0.90	0.87	0.65	0.71	0.86	0.91	0.62	0.66	0.77	1.02	0.79	0.86	
	n	135	47	135	47	135	47	135	47	135	47	135	47	
モ デル	性別主効果(F)	1.86		0.01		2.44		3.95 <sup>*</sup>		1.54		0.19		
	モデル主効果(F)	14.11 <sup>***</sup>		0.55		3.97 <sup>*</sup>		6.86 <sup>**</sup>		13.06 <sup>***</sup>		7.95 <sup>**</sup>		
	交互作用(F)	0.02		0.40		0.65		2.07		7.32 <sup>**</sup>		0.51		

\*\*\*  $p < .001$ ; \*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$ ; +  $p < .10$

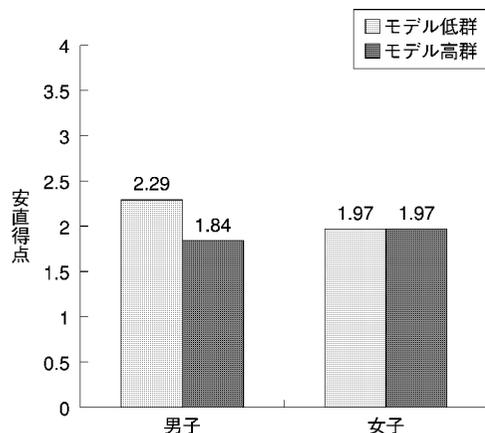


図1 性別×父モデル高低の安直得点

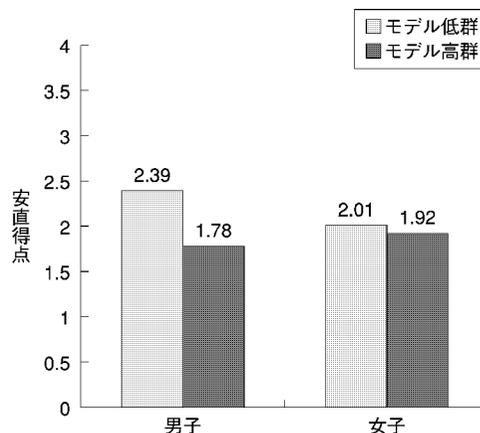


図2 性別×母モデル高低の安直得点

度の強さの交互作用効果もみられた。図1に示されているように、女子では父親モデル高低の効果はみられないが、男子ではモデル低群で安直傾向が強くみられている。最後に「不安定」では、父親モデルの高低の主効果が有意であり、交互作用効果が有意な傾向にあった。女子ではモデル高低の差がないが、男子で差がみられる。しかし関連性の方向が他の未決定因子とは逆で、父親モデル低群より高群で不安定傾向が高くなっている。

## (2) 母親の態度認知について

分散分析の結果は表3の通りである。「未決定」では母モデル高低の主効果だけが有意であり、男女ともにモデル高群より低群で未決定得点が高い傾向にあった。次に「模索」ではいずれの主効果も交互作用効果もみられなかった。

「不安」については、母モデル高低の主効果が有意であり、モデル低群で高群より不安が高かった。

次に「決定回避」においては、2つの主効果が有意であり、女子よりも男子で、またモデル高群よりも低群で回避傾向が強くみられている。

また「安直」についてみると、モデル高低の主効果と交互作用効果が有意であった。図

2に示されているように、モデル高群より低群で安直得点が高いが、この傾向は男子で強く、男子のモデル低群で特に安直が強くなっている。

最後に「不安定」ではモデル高低の主効果だけが有意であった。男女ともにモデル低群より高群で不安定傾向が強かった。

## (3) 母親の就業状態別の検討

母親をモデルとみなすことが職業未決定状態にどのように関連するかは、母親自身が職業をもっているか否かによって変わってくると考えられる。本研究では世間一般と同様に父親はほとんどフルタイムで仕事をしていた。しかし母親の就業状況は、フルタイム、パートタイムまたはアルバイト、無職に分かれていた。パートタイムまたはアルバイトでは勤務形態や勤務時間が多様でありひとまとめに論じることができないので、ここではフルタイムと無職とを取り上げる。それぞれの場合について、6つの未決定因子得点を従属変数として、性別×母親モデル高低の2要因の分散分析を行った。「未決定」では、モデル高低の主効果が、フルタイムで有意な傾向( $F=3.19$ ,  $df=1/69$ ,  $p<.10$ )、無職で有意( $F=8.05$ ,  $df=1/122$ ,  $p<.01$ )であった。いずれもモデル高群より低群で未決定得点が高

大学生の職業未決定に関わる要因の検討

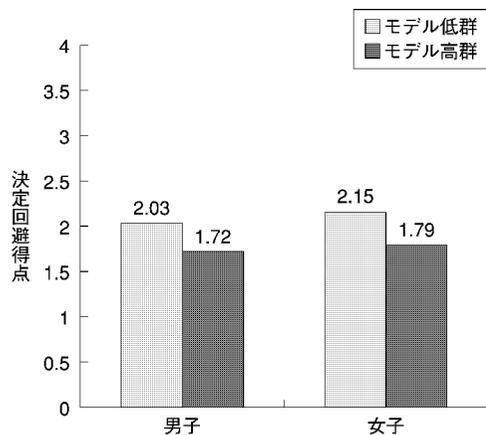


図 3-1 決定回避得点：母親がフルタイムの場合

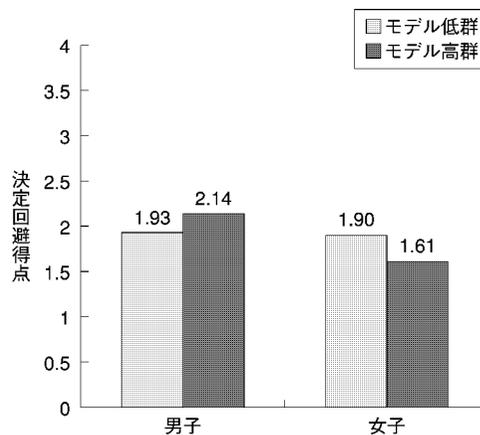


図 3-2 決定回避得点：母親が無職の場合

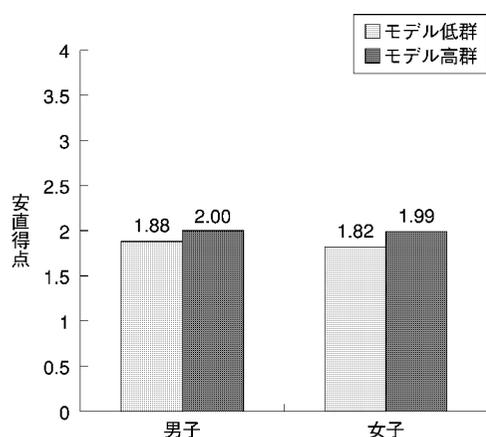


図 4-2 安直得点：母親がフルタイムの場合

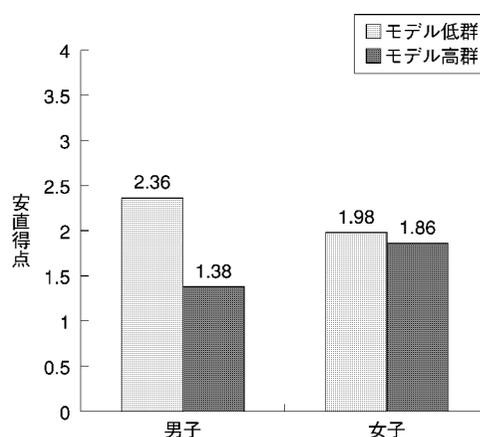


図 4-2 安直得点：母親が無職の場合

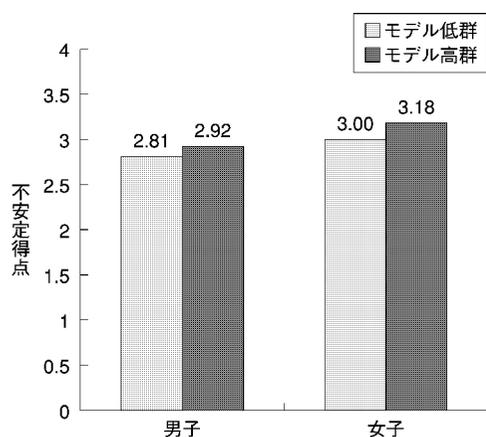


図 5-1 不安定得点：母親がフルタイムの場合

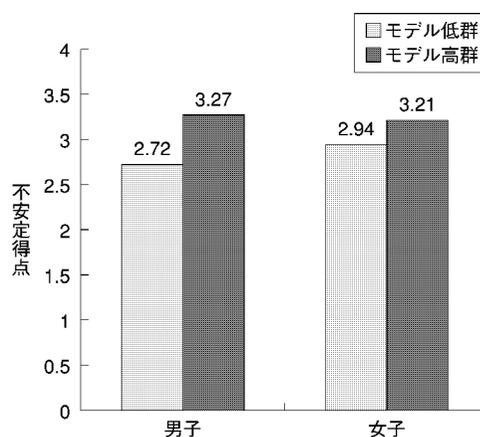


図 5-2 不安定得点：母親が無職の場合

くなっている。性別の主効果と交互作用効果はいずれの場合も有意ではなかった。

「決定回避」では、フルタイムの場合はモデルの主効果だけが有意であり ( $F=3.97$ ,  $df=1/69$ ,  $p<.05$ )、図3-1に示したように、モデル高群より低群で回避得点が高かった。しかし無職の場合には交互作用効果だけが有意であり ( $F=4.14$ ,  $df=1/122$ ,  $p<.05$ )、図3-2に明らかなように、男子ではモデル低群より高群で、女子では逆に高群より低群で回避得点が高くなった。

図4にみられるように、「安直」では、フルタイムの場合にはどの効果も有意ではなかったが、無職の場合にはモデルの主効果 ( $F=13.69$ ,  $df=1/122$ ,  $p<.001$ )と交互作用効果 ( $F=8.22$ ,  $df=1/122$ ,  $p<.01$ )とが有意となった。モデル高群より低群で安直得点が高いがこの傾向は男子で顕著である。

図5に示されているように、「不安定」については、フルタイムではどの効果も有意ではなかったが、無職ではモデルの主効果が有意であった ( $F=4.84$ ,  $df=1/122$ ,  $p<.05$ )。男子でも女子でも低群より高群で不安定得点が高い。

「模索」と「不安」においては、フルタイムの場合も無職の場合もどの効果も有意にならなかった。

### 3. 職業未決定型による親の態度認知の比較

職業未決定状態と親の態度認知との関連性を別の角度から検討する。ここでは、職業未決定の6因子の得点のパターンによって調査対象者を6つのタイプに分類し、親の態度認知がこのタイプ間でどのように異なるのかを検討する。

職業未決定の6因子の各々について上位二分の一から三分の一の者を高得点群とした。

ただし、「未決定」因子については、他の未決定のタイプと比較するために、「未決定」得点の下位二分の一から三分の一の者を「確立」

因子の高得点群とした。同一因子内で同点の者がかなりいたので、高得点者の人数にはかなりの幅がある。まずある因子で高得点群に入りかつ他のどの因子でも高得点群に入らない場合、高得点群に入っている因子のタイプとした。しかしこのようにタイプが決定された者は少なかった。そこで2つ以上の因子で高得点群に入っている場合には、個々人の因子の得点とその因子の平均値とのずれがもっとも大きい因子のタイプとした。ただしこのずれが2つ以上の因子で同程度の場合とどの因子でも高得点群に入らない場合は、タイプの決定ができないため、この分析から除外した。

#### (1) 父親の態度認知について

職業未決定型を独立変数、父親態度認知の3因子それぞれを従属変数とする1要因の分散分析を行った。「モデル」については表4に示したように有意な効果が得られた。Tukeyによる多重比較の結果、確立型の父モデル得点が安直型よりも有意に高かったが、他の組合せには有意差はなかった。「指示」でも有意な効果が得られた ( $F=2.37$ ,  $df=5/293$ ,  $p<.05$ ) が、多重比較ではどの組合せでも有意差はみられなかった。「話題」では有意な効果が得られなかった ( $F=1.22$ ,  $df=1/293$ )。

#### (2) 母親の態度認知について

父親の場合と同様の分散分析を行った。表4に示された通り、有意な「モデル」の効果が得られた。多重比較の結果、安直型が確立型、模索型、不安定型よりも母親をモデルとする傾向が弱かった。「話題」では有意な効果が得られなかった ( $F=1.45$ ,  $df=5/293$ )。「指示」については有意な効果が得られたが ( $F=2.34$ ,  $df=5/293$ )、どの型の間にも有意差はみられなかった。

表4 職業未決定型×親モデル, 職業人自己イメージ, 決定影響要因の分散分析結果

		職業未決定型						F 値	自由度	
		確立 (76)	模索 (48)	不安 (47)	回避 (30)	安直 (49)	不安定 (49)			
親 モ デ ル	父 モ デ ル	平均値	3.39	3.34	3.22	3.20	2.90	3.23	2.30*	5/293
		SD	0.87	0.71	0.78	0.95	0.75	0.85		
		多重比較の結果	確立>安直							
	母 モ デ ル	平均値	3.59	3.61	3.20	3.32	3.04	3.61	4.99***	5/293
		SD	0.75	0.81	0.80	0.94	0.71	0.76		
		多重比較の結果	安直<確立, 模索, 不安定							
自 己 イ メ ー ジ	重 厚 さ	平均値	4.00	3.79	3.62	3.37	3.45	3.82	6.57***	5/293
		SD	0.63	0.63	0.69	0.66	0.73	0.67		
		多重比較の結果	安直<確立, 模索, 不安定; 確立>不安; 回避<確立, 不安定							
	情 報	平均値	2.24	2.70	2.60	2.74	2.30	2.46	4.16**	5/293
		SD	0.69	0.74	0.74	0.68	0.72	0.75		
		多重比較の結果	確立<模索, 回避							
決 定 影 響 要 因	親	平均値	2.32	2.57	2.60	2.81	2.58	2.51	1.58	5/293
		SD	0.92	0.80	0.89	0.85	0.76	0.96		
		多重比較の結果								
	適 性	平均値	4.09	4.01	3.78	3.44	3.48	4.27	9.13***	5/293
		SD	0.74	0.71	0.79	0.67	0.80	0.75		
		多重比較の結果	回避, 安直<確立, 模索, 不安定; 不安<不安定							
身 近 モ デ ル	平均値	2.25	2.35	2.21	3.17	2.67	2.45	3.82**	5/293	
	SD	1.22	1.06	1.02	0.95	1.05	1.26			
	多重比較の結果	回避>確立, 不安, 模索								

\*\*\* p<.001; \*\* p<.01; \* p<.05

#### 4. 職業未決定型による職業人としての自己イメージの比較

職業人としての自己をどのようにイメージしているかが、職業未決定の状態によってどのように異なるのかを検討する。そのために職業未決定型を独立変数、「職業人としての自己イメージ」の3因子のそれぞれの得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。

「重厚さ」では表4の通り、有意な未決定型の効果がみられた。多重比較によると、確立型の「重厚さ」得点は回避型、安直型、不安

型よりも高く、また不安定型の「重厚さ」は回避型と安直型よりも高かった。「軽快さ」と「落ち着き」では有意な効果がみられなかった(それぞれ、F=1.26, df=5/293; F=1.69, df=5/293)。

#### 5. 職業未決定型による職業志向性の比較

職業に対する構えを表わす「職業志向性」と職業未決定状態との関連性を検討するために、職業志向性の5因子についても、職業未決定型を独立変数とする分散分析をそれぞれ

表5 職業未決定型×職業志向性の分散分析結果

		職 業 未 決 定 型						F 値	自由度	
		確立 (38)	模索 (28)	不安 (21)	回避 (19)	安直 (30)	不安定 (26)			
職業志向性	能力志向	平均値	4.02	3.88	3.94	3.74	3.32	4.22	5.65***	5/156
		SD	0.72	0.57	0.71	0.66	0.77	0.70		
		多重比較の結果	安直<確立, 模索, 不安, 不安定							
	人間関係志向	平均値	4.09	4.13	4.49	4.30	4.30	4.16	1.42	5/156
		SD	0.54	0.58	0.55	0.70	0.73	0.67		
		多重比較の結果								
	挑戦志向	平均値	2.97	3.10	3.15	3.00	2.73	3.47	3.54**	5/156
		SD	0.58	0.69	0.72	0.77	0.60	0.83		
		多重比較の結果	不安定>安直							
	安楽志向	平均値	2.80	3.10	3.57	3.65	3.81	3.50	8.18***	5/156
		SD	0.78	0.77	0.79	0.61	0.81	0.65		
		多重比較の結果	確立<回避, 不安, 安直, 不安定; 模索<安直							
	地元志向	平均値	2.82	2.75	3.31	3.08	3.02	3.21	1.14	5/156
		SD	0.98	1.13	1.01	0.77	0.96	1.35		
		多重比較の結果								

\*\*\* p&lt;.001, \*\* p&lt;.01

行った。その結果は表5の通りであった。

「能力志向」では有意な未決定型の効果が得られ、多重比較によれば、安直型が不安定型、確立型、不安型、模索型よりも「能力志向」が弱く、安直型と回避型の間には有意差がない。また回避型は他の4つの型との間にも有意差がみられなかった。「人間関係志向」では有意な効果が得られなかった。次に「挑戦志向」では有意な未決定型の効果が得られた。不安定型が安直型よりも有意に「挑戦志向」が強く、またわずかに有意にはならなかったが、不安定型は確立型よりも強い「挑戦志向」をもつ傾向があった。「安楽志向」でも有意な効果がみられた。多重比較によれば、安直型、回避型、不安型、不安定型よりも確立型で「安楽志向」が弱く、また模索型で安直型よりも安楽志向が弱かった。最後に「地元志向」で

は有意な効果がみられなかった。

## 6. 職業未決定型による職業決定影響要因の比較

職業未決定型によって職業を決定する際に重視する要因が異なるかどうかを検討するために、これまでと同様に、未決定型を独立変数、職業決定影響因の4因子各々を従属変数とした分散分析を行った。

結果は表4に示した。「情報」については有意な効果が得られ、多重比較によれば、確立型で回避型および模索型よりも「情報」の影響を低くみなしている。「親」の要因では有意な効果はみられなかった。次に「適性」では有意な効果が得られた。多重比較によれば、不安定型、確立型、および模索型は回避型および安直型よりも「適性」を重視する傾向が

強いといえる。また不安定型は不安型よりも「適性」を重視している。最後に「身近モデル」でも有意な効果が得られた。多重比較をしたところ、回避型で不安型、確立型、および模索型よりも「身近モデル」の影響を強く認知していた。

## IV. 考 察

### 1. 職業未決定尺度の因子構造

本研究でも鹿内（2005）と同様に6因子が得られ、「未決定」、「模索」、「不安」、「決定回避」、「安直」、「不安定」と名付けられた。内容的にもほぼ類似した因子構造が得られたが、異なった部分もみられた。鹿内（2005）で抽出された「意欲の低さ」の4項目のうち、「職業について考える意欲がわからない」と「将来の職業について真剣に考えたことがない」の2項目が今回は「決定回避」に入り、「職業を決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う」が「模索」へ、「職業といわれてもまだ先のことのようでピンとこない」が曖昧な項目としてどの因子にも属さなかった。「職業を決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う」という項目は、鹿内（2005）では「模索」への負荷量が0.37あり、また今回は「決定回避」に0.25の因子負荷量を示したように、項目内容の前半に重点が置かれれば決定回避の意味合いが強く、後半が重視されれば模索を表わすという曖昧な項目だと考えられる。

今回新たに抽出された因子が「不安定」と名付けられたものである。表1のように2項目だけで構成されているが、回避や意欲の低さとは異なり、決定しようとする構えはあるがまだその状態に至らず気持ちが揺れている状態を示しているので「不安定」と名付けた。

鹿内（2005）では「意欲の低さ」と「決定回避」との意味の違いに曖昧なところがあっ

たが、今回の6因子は相互により明確に区別されやすいと思われる。

### 2. 親の態度認知と職業未決定との関連

父親をモデルとする傾向の高い群は低い群よりも、未決定、不安、決定回避、および安直得点が低く、またこの関係は女子よりも男子で強いという結果が得られた。ほとんどの父親がフルタイムで働いているので、父親は職業人としてのモデルとなり得るが、父親がそのような役割を果たしている場合にはその子どもの職業意識が発達するといえよう。また男子において父親モデルの効果が大きいということから、同性の親モデルの影響の強さが明らかである。

母親モデルの効果も未決定、不安、決定回避、安直でみられ、父親の場合と同様に、モデルとする傾向が高い群は低い群よりも職業意識の発達のみられた。性別とモデル高低の交互作用は安直だけでみられたが、父親の場合と異なり、同性である女子よりも異性である男子で母親モデル低群よりも高群で安直得点が低いという傾向がより強くみられた。父親が望ましいモデルとなっているか否かが同性である男子の職業意識の発達により強く関わっていたが、母親モデルの影響が同性である女子でより強くみられるという結果は得られず、むしろ母親モデルの影響が男子と女子とで異なった形で表れるという結果であった。

鹿内（2005）では、「混乱」と「決定回避」について女子では母親モデルの高い場合に低い場合よりもこれらが弱い、男子では逆に母親をモデルとする傾向が強いほうが混乱や決定回避も強くなるという結果が得られた。しかしこのような結果は本調査では得られなかった。鹿内（2005）の結果は、母親は父親のように職業人としてのモデルになりにくい、男子が母親をモデルとみなすということは母親と息子との密着を意味し、この依

存的関係が職業発達の混乱や決定回避をもたらしていると解釈された。しかし本研究ではこのような交互作用がみられなかった。もし母親が父親と同じようにフルタイムで働いているなら、母親も職業人としてのモデルとなり得るので、子どもの職業意識に対しても父親モデルと同様の影響を及ぼすことが考えられる。そこで、母親がフルタイムで働いている場合と無職の場合を分けて検討した。

その結果、「決定回避」では、母親がフルタイムで働いている場合には男女に関わらずモデル高群で低群よりも回避傾向が弱い、母親が無職の場合には女子ではモデル高群で回避傾向が弱い、男子では逆にモデル低群より高群で回避傾向が強くなっていた。図3にみられるように、母親が無職の場合のモデル高群では女子より男子の回避傾向が強いが、母親が無職のモデル低群と母親がフルタイムの場合には回避傾向の男女差がみられないのである。言い換えれば専業主婦である母親を望ましいモデルとみなす男子では回避傾向が強くなるといえよう。これは鹿内(2005)の解釈と斉合する結果であり、母子密着が男子の母親への依存を強め、その結果子どもの自立を妨げることを表わす結果であると考えられる。母親をモデルとみなすことの質的な意味が青年期の男女で異なり、女子では母親を本来の意味のモデルとしてみなすことで大人として自立していくことが促されるのに対し、男子では家庭にいる母親をモデルとみなすことは母親への依存を意味し、職業人として社会に出ていくことを躊躇させるのである。しかし本研究ではこのような解釈についての確証はないので、この点は今後の検討課題である。

「安直」でも母親の就業形態によって異なった結果が得られたが、その様相は決定回避の場合と異なっていた。母親がフルタイムで働いている場合には母親モデルの高低による安直得点の違いはみられず、性別との交互作用

もみられなかった。しかし母親が無職の場合には、女子ではモデルの高低による違いはなかったが、男子では高群よりも低群で安直得点が高かった。つまり「安直」では、決定回避とは違い、専業主婦の母親をモデルとすることが男子の職業意識の発達を妨げることはなくむしろ発達を促していると言える。決定回避は職業人として社会的役割を果たすことへの消極的な構えや意欲の低さ、その背後にある不安であるのに対し、安直は社会に出て働くことに対する不安などではなく、就職先を安易に選ぶ態度であり、社会に出て働くことへの抵抗感はむしろ弱いのかもかもしれない。

### 3. 未決定型による比較

調査対象者を、確立型、模索型、不安型、回避型、安直型、不安定型の6タイプに分け、タイプによる違いを検討した。確立型がやはりさまざまな側面で望ましい特徴を示していた。確立型は父親についても母親についても望ましいモデルとみなす傾向が強く、また職業人としての自己イメージも重厚さが高く、自分の望ましい将来像をもつことができている。職業志向性で確立型に特徴的なのは、気楽さや休日の多さ、残業の少なさを求める安楽志向が低いことである。またプロとしての実力を身につけることや仕事を通して自分を成長させることを求める能力志向も強く、将来の仕事に対して積極的な構えをもっていることが明らかである。しかし責任の重い困難な仕事をやり遂げたいという挑戦志向は高くない。

確立型と対照的なのが安直型である。父親および母親をモデルとみなす傾向は弱く、重厚さの自己イメージも低い。また職業志向性については、安直型は能力志向がもっとも低く(回避型を除く4タイプとの差は有意)、挑戦志向も6タイプの中でもっとも低く、逆に安楽志向はもっとも強くなっている。安直型

の意味から当然ではあるが、自分の能力・性格・興味などにあう職業に就こうという構えも弱い。とりあえず就職できるところに就職するが仕事が厳しかったり忙しかったりすればすぐ辞めてしまう恐れがあると考えられる。

模索型は確立型と同様に望ましい職業準備状態にあるが、確立型ほどには安定しているわけではない。職業志向性については能力志向が強く安楽志向は弱くなっており、職業に対して意欲的であり、また情報を集めて自分の適性や興味に合う職業を決めようという積極的な構えももっている。しかしまだ確かな決定ができていない状態にあるため、職業人としての重厚な自己イメージは確立型ほど強くはなっていない。

不安型は必ずしも確立型と対照的なわけではない。安楽志向は確立型よりも強いが能力志向もある程度もっている。しかし仕事をしていく自分に不安をもっているため重厚さの自己イメージは低くなっている。

回避型は安直型と似た職業意識をもつ。重厚さの自己イメージは6タイプ中もっとも低く、確立型および不安定型よりも有意に低くなっている。職業志向性についても安楽志向が強く、他のタイプとの差は有意ではないものの能力志向が弱いという消極的な姿勢がみられる。また回避型に特徴的なのは、職業を決定する際に影響する(した)要因として親以外の身近な人の仕事を挙げる傾向が強く、自分の適性や興味を挙げる傾向が弱いことである。前述のように決定回避が自立への不安によるものであれば、回避型はまだアイデンティティが確立されておらず自信が低いあるいは自分の適性や興味がわかっていない状態にあるといえよう。したがって具体的な身の回りにいる人の影響を受けると考えられる。

最後に不安定型の特徴をみていく。このタイプは職業志向性の能力志向と挑戦志向が6タイプ中もっとも高く、仕事を通して自己を

高めていこうとする構えが強い。このことは進路決定に影響する要因として自分の適性を挙げる傾向の強さからも言えよう。また重厚さの自己イメージも確立型に次いで高い。しかしその反面安楽志向もある程度もっているという矛盾した側面を併せ持っている。また不安定得点が父親モデルおよび母親モデルの低群よりも高群で高いという結果もみられた。これらを考え合わせると、不安定型は親との良好な関係の中で親をモデルとして職業に対して意欲的な構えを形成するが、まだ決定に結びついていないため揺れ動く部分があるのではないだろうか。

#### [引用文献]

- (1) 安達智子 2001 進路選択に対する効力感と就業動機, 職業未決定の関連について——女子短大生を対象とした検討—— 心理学研究, 72, 10-18
- (2) 小久保みどり 1998 大学生の職業選択・キャリア開発へのモチベーションとキャリア志向 立命館経済学, 37, 1-20
- (3) 鹿内啓子 2004 女子高校生の進路選択に関わる要因 北星学園大学文学部北星論集, 41, 13-28
- (4) 鹿内啓子 2005 大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因 北星学園大学文学部北星論集, 42, 69-88
- (5) 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30
- (6) 浦上昌則 1995 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科——, 42, 115-126
- (7) 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 1986 職業レディネスと職業選択の構造——保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連 名古屋大学教育学部紀要——教育心理学科—— 30, 63-98
- (8) 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて——教員養成学部の学生を対象に——, 教育心理学研究, 49, 209-218

[Abstract]

A Study of Factors Related to Career Indecision  
of College Students:  
Comparison of Indecision Types

Keiko SHIKANAI

This study investigates the effects of parental modeling on the career indecision of college students and the differences in career orientation among indecision types. A Career Indecision Scale, Self Image as Worker Scale, Parent-adolescent Relationship Scale, and Job Orientation Scale were administered to 186 college students. The Career Indecision Scale was divided into six subscales: Indecision, Exploration, Confusion, Avoidance of Decision, Easiness, and Instability. On the whole, positive parental modeling of the parent of the same sex promoted the career decision status of students. However, for male students whose mother is a housewife without a job, modeling after their mother was related to Avoidance of Decision. For male students whose mother is a full-time worker, modeling after their mother was positively related to career development. This result was interpreted to mean that male students who model after a non-working mother have adhesion to their mother that hinders their independence from parents and ego-development. Students of the Decision Type have a positive self-image as a worker and high orientation toward a job. Students of the Easiness Type are immature concerning career development.